

世界史学習に関する岩手大学生の意識調査

安井 萌^{*1}・吉原 秋^{*2}・小川 春美^{*2}・鈴木 道也^{*3}・小川 知幸^{*4}・畑 奈保美^{*5}・津田 拓郎^{*6}
(2017年2月15日受理)

Moyuru YASUI, Aki YOSHIHARA, Harumi OGAWA, Michiya SUZUKI,
Tomoyuki OGAWA, Naomi HATA and Takuro TSUDA

A Survey on Iwate University Students' Opinions about High School World History Courses

はじめに

今から10年ほど前の2006年秋、全国の多くの高校で必修科目世界史の履修漏れが発覚し、大きな社会問題となった。いわゆる世界史未履修問題である。筆者の一人は当時この問題を受け、岩手大学生187名（うち教育学部生88名）を対象に、緊急調査を行った。その結果、岩手大学生の世界史履修の実態、ならびに彼らが未履修問題および世界史という科目に対しどのような認識を抱いているかについて、貴重な知見を得た。この調査の結果は、本誌第10号に「世界史未履修問題と岩手大学生」と題して報告した（安井（2011））。その後世界史教育をめぐる状況には、外見上いくらかの変化が見られた。未履修問題をきっかけに世界史のあからさまな履修漏れは影をひそめ、大部分の高校生は何らかの形でこの科目を学ぶようになったと考えられる。また「ゆとり教育」からの脱却にともない、中学校で教えられる世界史関連の授業内容が増え、これにより中学・高校間の断絶がやや緩和された。一方でしかし、世界史教育に内在する基本的問題はなお解決されないままだとも言える。高校世界史の授業は、現行の大学受験への対策を前提とする限り、どうしても知識の注入に重きを置かざるをえない。こうした授業はしばしば「詰め込み」と批判されるが、しかしでは世

界史授業のあるべき姿とは何か（具体的に何を、どこまで、どのように教えるのか、また何をもって授業目標は達成されたとするのか）とえば、この点に関するコンセンサスが必ずしも存在するわけではないのである。

さて、未履修問題から約10年経った現在、世界史は学習者の目にどのように見られているのだろうか。以前と比べ、そこに何か変化はあるのだろうか。一昨年、岩手県立大学の研究プロジェクト「世界史教育と外国史研究との連携・協働に向けた総合研究—岩手県における世界史教育の現状と課題—」の一環として、岩手県内外のいくつかの大学で、世界史に関する学生の意識調査が行われた。岩手大学でも、前回同様教育学部の学生を中心にアンケート調査が実施された。本稿では、この調査を通じ明らかになった、現時点における岩手大学生の世界史の履修状況、ならびに当該科目に対する彼らの認識のあり方を報告するとともに、以前の調査結果と見比べながら、若干の点について考察を試みたいと思う。

1. アンケートの実施状況

本調査は2015年12月9日・10日の両日、教職科目である「教育心理学」の受講者を対象に行われた。この授業は教育学部学校教育教員養成課程の

* 1 岩手大学、* 2 岩手県立大学盛岡短期大学部、* 3 東洋大学、* 4 東北大学、* 5 東北学院大学、* 6 愛知県立大学

必修科目であり、受講者の大半を同学部生が占めるが、一部教員免許取得を目指す他学部生も含まれている¹⁾。調査にあたっては、授業前にアンケート用紙を配布し、その場で10分以内に記入してもらうやり方を取った。回答者は全員で209名、うち約8割の166名が教育学部生であり、他は工学部（現、理工学部）生20名、人文社会科学部生12名、農学部生10名、社会人（50代、身分は不明）1名であった。学年は1年生24名（人文社会科学部生8名、工学部生16名）、2年生177名（教育学部生163名、人文社会科学部生4名、農学部生6名、工学部生4名）、3年生6名（教育学部生3名、農学部生3名）、4年生1名（農学部生1名）であった。つまり回答者の多くは教育学部2年生ということになるわけであり、その人数（163名）は同学部2年次学生全体の約65%に当たる。なお、出身高校の所在県を尋ねたところ、岩手県は4割弱の79名、残りは宮城県43名、青森県21名、秋田県16名、福島県7名、山形県3名、東北以外（栃木県、北海道など）22名であった。

2. 調査結果

アンケートの質問項目、および各項目に対する回答結果は以下のとおりである。なお、問5および問6は自由記述の質問項目であり、その回答内容については、続く考察において主なものを紹介する。

問1：高校在学時に世界史を履修しましたか。

- 1 はい 201名 (96.2%) [割合は209名中]
- 2 いいえ 8名 (3.8%)

	教育学部	人文社会科学部	農学部	工学部
はい	160	11	10	19
いいえ	6	1	0	1

社会人の回答は「はい」

問2：問1で「はい」と回答した方に伺います。
履修した世界史の科目はどれですか。

- 1 世界史A 124名 (62.0%) [割合は200名中]
- 2 世界史B 55名 (27.5%)
- 3 両方 12名 (6%)
- 4 わからない 9名 (4.5%)

	教育学部	人文社会科学部	農学部	工学部
世界史A	97	4	7	16
世界史B	42	7	3	3
両方	12	0	0	0
わからない	9	0	0	0

問3：センター試験で受験した地歴・公民の科目はどれですか。あてはまるものすべてを選んでください。

- 1 世界史A 6名 (2.9%)
[割合は社会人を除く208名中]
- 2 世界史B 43名 (20.7%)
- 3 日本史A 9名 (4.3%)
- 4 日本史B 82名 (39.4%)
- 5 地理A 3~5(?)名 (1.4~2.4%)
[「5か6」と答えた者2名]
- 6 地理B 52~54(?)名 (25.0~26.0%)
[]
- 7 現代社会 56名 (26.9%)
- 8 倫理 36名 (17.3%)
- 9 政治・経済 46名 (22.1%)
- 10 倫理・政治経済 26名 (12.5%)
- 回答なし 1名 (0.5%)

	教育学部	人文社会科学部	農学部	工学部
世界史A	6	0	0	0
世界史B	34	6	2	1
日本史A	7	0	1	1
日本史B	71	5	1	5
地理A	3~4	0	0	0~1
地理B	38~39	0	2	10~11
現代社会	41	6	4	5
倫理	35	1	0	0
政治・経済	42	2	0	0
倫理・政治経済	21	3	2	2
回答なし	1	0	0	0

問4：高校で世界史が必修科目なのを知っていましたか。

- 1 知っている 159名 (76.1%) [割合は209名中]
 2 知らなかった 49名 (23.4%)
 回答なし 1名 (0.4%)

	教育学部	人文社会科学部	農学部	工学部
知っている	126	9	8	16
知らなかった	40	3	2	4

社会人は回答なし

問5：高校で世界史が必修科目なのをどう思いますか。

問6：世界史を学ぶことにはどのような意味があると思いますか。

3. 考察(1) ——問1から問4まで

本節では、まず問1から問4までの回答結果について考察を行いたい。

問1の質問に対しては、専攻のいかんを問わず、ほとんどの学生が「世界史を履修した」と答えている。このことから、未履修問題以降、指導要領の遵守が今に至るまで徹底されている状況が見取れる。「履修しなかった」と答えた者の中にも、履修したことを忘れてしまった、あるいは勘違いで誤記をした者が含まれている可能性がある²⁾。一方で、「私の高校では教科書が配られたが授業はなかった」(教育学部・2年〔以下、教2の具合に略記する])といった、10年前に問題視された手法が、依然として一部で残存していることがわかった。

問2の質問に関しては、世界史Aのみ履修した者の数が、世界史Bの履修者(両方履修した者を含む)の約2倍という結果になった。ただし内訳を見ると、学部により多少の違いが認められる。世界史B履修者の学部ごとの割合は、教育学部34%、人文社会科学部64%、農学部30%、工学部16%であった。教育学部以外の3学部の回答者

についてはそもそもサンプル数が少ないため、確かなことは言えないが、全体的傾向として世界史B履修率の「文高理低」ということは言えそうである。本調査では教育学部生と農学部生の差が意外に小さい結果となったが、これはあくまで後者の回答者数の少なさに起因するものと思われる。

はたして高校で世界史の科目選択はどのようになされるのだろうか。教員からの聞き取りや、また各校の教育課程に関する情報からすると、岩手県内の普通高校で行われているやり方にはおおよそ次のパターンがあるようである。

文系——①1年次で全員を対象にした世界史A(必修)を学んだのち、2年次で希望者のみ世界史Bを履修。

②2年次で世界史AかBを選択。

③2年次で世界史Bのみを履修。

理系——①1年次で全員を対象にした世界史A(必修)のみを履修。

②2年次で世界史AかBを選択。

③2年次で世界史Aのみを履修。

一部の有力進学校で文系③、理系②のパターンが見られるものの、全体として文系は①か②、理系は①か③を採用する高校が多い。理系①・③の場合、理系志望の生徒に世界史Bを学ぶ選択肢はそもそもない。理系②でも負担の大きな世界史Bを積極的に選ぶ者は少ないと思われるので、結果的に理系学生の世界史B履修率が非常に低くなるのは当然と言わねばならない。かたや文系①・②では、世界史Bの履修が各人の選択に委ねられる。アンケート回答者のうち、どれほどの割合がこのパターンに該当し、そのうち何人が世界史Bの履修を選択したのかはわからない。ただ、教育学部生(そのうちかなりの部分は文系と考えられる)の回答者全体の履修状況から見て、世界史Bを選択しなかった者の方が多数だろうと推測される。文系②の場合、世界史を初めて習う高校生が世界史BよりAを選びがちなのは、ごく自然なことだと言える。未知の科目である世界史よりも、すでに馴染みのある日本史か地理でB科目を選び、ひいてはこれを受験科目とするのが無難

と、大方の者は考えるはずだからである。

同じ文系学部でも教育学部生より人文社会科学部生、また理系学部では工学部生より農学部生の方が、世界史Bの履修率が高い。人文社会・工・農学部生に関しては回答者の少なさゆえに確かなことは言えないが、しかし一つの可能性として、実学系より基礎学問系の学生に世界史Bの履修者が多い、言い換えると、世界史Bの履修者は基礎学問をより指向しやすい、ということはあるかもしれない。

問3の質問に対し、センター試験で世界史を受験したと答えたのは、世界史A・B合わせて49名、全体の24%であった。地歴科目の中で受験者が最も多いのは日本史(44%)、次いで地理(27%)の順である。学部ごとに見ると、最も対照的なのは人文社会科学部生と工学部生であり、前者では世界史と日本史に選択がほぼ二分され、地理はゼロなのに対し、後者では地理の選択者が過半を占めている。教育学部生は両者の中間的な形態となっている。こうした傾向は、岩手大学入試課がまとめた学生の受験科目に関するデータ(平成26~28年度)とも合致している。このデータは非公表なので、ここに具体的な数値を示すことはできないが、人文社会科学部生の世界史の受験率は比較的高く、地理の受験率は低いのに対し、工学部生の世界史の受験率は極度に低く、逆に地理の受験率が非常に高い。教育学部生の地歴受験科目は、どの年度も日本史、地理、世界史の順番で多い。本調査では、同じ理系学部ながら農学部生には工学部生のような地理への集中は見られず、各科目に大体均等に受験者が散らばっている結果となった。しかしながら入試課のデータによると、農学部生全体の受験傾向は工学部生とほぼ同じであり、世界史の受験者は極度に少なく、地理の受験者が圧倒的多数となっている。なお、センター試験の全国における世界史(AおよびB)の受験率は、2014(平成26)年度16%、2013(平成25)年度17%、2012(平成24)年度18%であり、日本史は29%、30%、31%、地理は28%、27%、26%である³⁾。この数字を岩手大学生の受験状況と一概

に比較はできないが、日本史・地理が相対的に高く、世界史は低いという傾向は共通している。

世界史Bの履修者のうちセンター試験で世界史を選んだ者の割合は、64%である。世界史A、B両方履修した者に限れば、12名中11名が世界史で受験している。彼らは高校1年次に全員履修の世界史Aを学んだのち、さらに世界史Bを選択履修した者であり、世界史に特に強い関心を有すると考えられる。これに対し、世界史Bのみを履修した者のうち、半数近く(42%)は世界史を受験していない。世界史Bの履修を事実上強制された者(文系③のパターン)ばかりでなく、自らこれを選択した者(文系②のパターン)の中にも、最終的にこの科目を受験科目としなかった者がかなりいるようである。

問4の質問に対しては、76%の回答者が世界史必修を「知っている」と答えた。この数字は、未履修問題を生々しく記憶する世代には少々低く思えるかもしれない。だが回答者の大半はこの騒ぎが起きた当時まだ10歳前後だった者たちである。かつて世界史必修をめぐる混乱があったことを彼らはあまりよく覚えておらず、またこの出来事を本質問と関連づけて意識することもなかったと考えられる。そうしたことからすると、四分の三以上の認知度はむしろかなり高いとも評価できる。比較的多くの学生が世界史必修を認識していたのは、やはり高校時代文系理系を問わず世界史を学ばせられた実体験によるところが大きいだろう。これは、未履修問題以後、世界史必修が広く徹底されたことの一つの帰結だとも言える。

4. 考察(2) ——問5および問6

続いて、問5および問6の自由回答欄の回答結果について、(1)世界史必修、(2)世界史を学ぶ意味、(3)世界史の授業内容、の三つの観点から考察したい。

(1) 世界史必修について

問5の「世界史必修をどう思うか」との質問に対し、明らかに肯定的ないし否定的な意見と、賛否の不明確な意見(無回答を含む)があった。賛

否を明言しない意見の中にも、どちらかと言えば賛成もしくは反対に傾くニュアンスを読み取れるものがあった。例えば「〔世界史の学習には〕あまり意義がないと感じる」(教2)といった回答は、否定的と解して差し支えないだろう。また「なぜ世界史が?と思う」「なぜ世界史なのかなと思う」(ともに教2)といった答えは、単純な疑問とも読めるが、しかしやはり回答者の意識の根底に世界史必修に対する懐疑心があることは否めないように思われる。やや恣意的判断になるのを承知しつつ、中間的意见も可能な限り賛成・反対に選別した結果、賛否の人数は以下ようになった。

	賛成	反対	その他
教育学部	102名	33名	31名
人文社会科学部	8名	3名	1名
工学部	10名	6名	4名
農学部	8名	2名	0名
社会人	1名		
合計	129名	44名	36名

賛成の割合は62%、反対は21%、その他は17%である。学部ごとの比較はこの場合あまり意味をなさないようにも思えるが、参考までに賛成の割合の高い順に並べると、農学部(80%)、人文社会科学部(67%)、教育学部(61%)、工学部(50%)となる。理系学部生の賛成の割合が意外に高い印象を受けるが、これはあくまで教職科目の授業の受講者を対象にした調査結果であることを念頭に置くべきだろう。次に、高校で世界史を履修した者、しなかった者の内訳を示すと、

	賛成	反対	その他
履修した者	126名	41名	34名
履修しなかった者	3名	3名	2名

となる。未履修者が必ずしもすべて世界史必修に反対とは限らないのは、前回の岩手大学での調査や、また岩手県立大学盛岡短期大学部での調査結果からも明らかなことである⁴⁾。

ここで注目したいのは、2006年の調査結果との比較である。この調査では、世界史必修に肯定的な意見は50%、否定的なのは34%だった。これに対し、今回の調査では、賛成が10%ほど増加し、逆に反対が同じ程度減少している。これは有意な数字の変化と認めてよいだろう。なぜこの間世界史必修に肯定的な見方が増加し、否定的な見方は減少したのだろうか。前回の調査は未履修問題をめぐる混乱の最中に行われたため、学生たちの意見が現状に懐疑的な方向に傾きがちだったということは、一つあるかもしれない。しかし今回賛成と反対の差が40%まで開いた要因は、これだけではないように思われる。この点については、次項(2)の議論でまたあらためて立ち戻りたいと思う。

世界史必修への賛否を、さらに世界史Bを履修した者とそうではない者、センター試験で世界史を受験した者とそうではない者に分けて示すと、次のとおりである。

	賛成	反対	その他
世界史Bの履修者	49名	8名	10名
世界史Aのみの履修者 (世界史Bの履修者には、A・B両方の履修者を含む)	72名	29名	23名
世界史を受験した者	36名	4名	9名
世界史を受験しなかった者	91名	40名	27名

世界史Bの履修者のうち、賛成は73%、反対は12%、世界史Aのみの履修者は、賛成58%、反対23%である。世界史Bの履修者には、自らこれを選んで学んだ者が多く含まれている。彼らは世界史に比較的強い親近感を持つと見られ、したがって世界史Aの履修者と比べ世界史必修に対し肯定的な意見が多くなるのは、自然な結果だと言える。同じことは、世界史を受験者にもあてはまるだろう。世界史を受験した者は、世界史必修に賛成73%、反対8%であるのに対し、受験しなかった者は、賛成58%、反対25%となっている。

世界史必修を妥当、もしくは妥当でないとする理由は何か。世界史必修を妥当とする根拠の方は、

次項(2)で取り上げる「世界史を学ぶ意味は何か」という議論と重なるところが大きいので、以下ではひとまず、妥当でないとする意見のみを見ることにしよう。世界史必修に否定的な回答の中で目に付くのは、自らの経験から「世界史は役に立たなかった」とする意見である。「1年間でつめこんで学習したので、ほとんど記憶に残っていないし、役に立ったなと思ったことも特にない」(教2)「ほとんど何を学習したか憶えていない」(教2)「正直、世界史の内容は全く覚えていないし、受験でも使わなかったので必修科目にしなくても良いのではないかと思います」(農2)。他の科目よりなぜ世界史が優先されなければならないのか疑問、という回答も多かった。「社会科の科目はたくさんあるのにもかかわらず、世界史が必修の理由は分からない。現代社会や政治・経済などの方が、社会と関わりがあると思う」(教2)「世界史よりどちらかといえば、地理の科目の方が生活に役立つと思うので、必修科目にするなら地理にした方がいい」(工2)「学ぶことは良いことだとは思いますが、社会科目が沢山あるので世界史も選択科目でよいと思う」(工1)。こうした回答の中で特に目立つのは、世界史より日本史を必修にすべき、との意見である。「日本人なので日本史必修のほうがいい」(教2)「正直、なぜ世界史必修で日本史は必修でないのかなぞである。日本人であるのに」(教2)「日本人ならば日本史を学ぶべきだ。それが世界に立つべき者の条件、グローバルな現代を生きる者にとって本当に必要な知識だ」(人1)。受験との兼ね合いを理由に挙げる意見も、もちろんあった。「センター試験で受験しないのなら必修でなくてもよいと思う」(教2)「[世界史の履修のため]他教科にさく時間が減る」(教2)。だがこうした回答は数件に留まり、全体としてさほど多くはない。前回の調査でもそうだったが、世界史必修への賛否を受験の必要性で判断する者は、比較的少ないと言える。

(2) 世界史を学ぶ意味は何か

世界史を学ぶ意味は何か、との問いかけに対し、問6やまた問5において様々な答えが寄せら

れた。多様な回答内容を、ここでは吉原他(2016)に基づき七つのカテゴリー、すなわち「現代の国際社会における問題を知るうえで大切」「日本との比較ができるし、日本を知るうえで大切」「世界を知り、グローバル化に対応するため」「大学での勉強に必要」「一般教養として大切」「他の面で役に立つ」「その他」に整理する。もちろんこれら諸カテゴリーの境界は実際かなり曖昧であり、個々の回答を分類するにあたり、判断に迷う場合が少なくない。以下ではそれぞれの回答数を一応掲げるが、見方によりこれらの数値は十分変わりうることを、あらかじめ断っておきたい。

まず最も数が多かったのは、世界史学習は「世界を知り、グローバル社会に対応するため」有用とするものだった。こうした意見を記した者は、少なくとも47名に上る。いくつか該当する回答例を挙げると、「グローバル社会となった今、他の国の歴史や文化を知ることが必要不可欠だ」(教2)「グローバル化が進む現在、高校生が世界に目を向ける良いきっかけになる」(教2)「グローバル化が進む近年では、他国の歴史を知ることが、よりよい関係を築くために必要不可欠である」(教2)「日本以外の国の考え方を知ったり[中略]他の歴史を知ること、これからの未来を予測できる」(教2)「現代社会、日本史を客観視するためにも必要」(教2)「日本の中だけで完結しないような見方を知る」(教2)。

次いで多かったのは、「現代の国際社会における問題を知るうえで大切」とする回答である。「今この世界がどのように成り立ったのかを知ること、今それぞれの国が抱えている問題や外交関係を解決する糸口を考えることができる」(人2)「歴史の流れを理解することで、現在の世界の情勢や日本の状況に至るまでの背景を理解できる」(教2)「世の中の情勢が分かるので、国際的な現代の出来事を見た時に過去の流れをふまえてとらえることが出来ると思います」(教2)「現代の問題の起源が世界の歴史にあることを学ぶ上で大切」(教2)「現代の世界情勢がなぜそうなっているのか、その背景について理解できる。そうするこ

とでニュースを見る視点が変わる」(農2)。こうした意見を記した回答者は、全部で32名になる。

同数の回答が寄せられたのが、「日本との比較ができるし、日本を知るうえで大切」というものである。「世界史を学ぶことで日本史への理解も深まると思うので、良いと思う」(教2)「世界で起こった出来事が、日本に与えた影響などを知ることができるので、世界と日本との関係が理解しやすくなる」(教2)「他の国々の出来事を知ること、日本のあり方についても考えを深めることができる」(教2)「他国の歴史を学ぶことは自国の歴史を見つめ直すきっかけになると思います」(人1)。

やはりほぼ同じ30名ほどの回答者が挙げたのは、「一般教養として大切」という答えである。「世界史は半分一般常識というか、知らないと困る話題が多くあるので、やったほうが望ましい」(教2)「センターで使う使わないは別として、基礎知識として世界の歴史を勉強することは大事だと思う」(教2)「最低限度の社会の知識を身に付ける上で大切なこと」(教2)「理系でも歴史を学ぶことは、考え方や知識のひろがりから必要であると思います」(農2)。「見識の幅を広げる」「人間として豊かになる」といった類いの答えも、この範疇に属するだろう。

残るカテゴリーの回答数はかなり少なくなる。「大学での勉強に必要」としたのは4名で、中には例えば、「私自身は英語科なので英語の歴史を勉強したが、歴史と言語は結び付いていたので、高校での世界史の学習が大学にきてから役に立った」(教2)といった答えがあった。「他の面で役に立つ」とする者は16名で、具体的には外国人との交流の際に有益とする意見が比較的多く——「他の国の人々とのコミュニケーションにつながる」(教2)「外国の人々との交流も歴史を知っていることで行いやすくなる部分もあると思う」(教2)など——、他に「世界史を知ることで文学作品や音楽といったような文化的な興味の理解も広がる」(教2)とする意見もあった。興味深いのは、世界史学習が仕事にも役立つとする答え

が、理系学部の学生を中心に4件ほど見られたことである。「外国の企業と取り引きをすることが多くなっている現在、社会に出て、実際そういった場面になった場合、相手の歴史や文化を知っていることにより、それが有利に進められると思います」(工1)「世界の歴史を知ること、将来的に仕事の中などで役立つ」(工1)。卒業後民間企業に就職し世界を相手に活動するという、かなり明確なイメージを抱く学生にとって、世界史学習はより実用的意義を持つものとして意識されている面があると言えよう。

「その他」の中には、いわゆる「歴史の教訓」を挙げた回答が含まれる。例えば、「同じ過ちを繰り返さないため」(教2)「[戦争を]繰り返さないために、どうして戦争に至ってしまったのか知ることができる」(教2)などがそうである。このような回答数は合わせて6件あった。これ以外のユニークな記述として、「世界遺産に強くなる」(教2)というものもあった。高校世界史の授業では、しばしば世界遺産にまつわる教材が利用されると聞かすが、こうした授業の影響を窺わせる回答である。

さて、2006年の調査結果を振り返ると、世界史を学ぶ意味について、やはり国際化への対応、世界情勢の理解、自国のより深い理解、一般常識・教養といった意見が寄せられている。それぞれの回答数は、国際化への対応が13件、世界情勢の理解が7件、自国の理解は6件、一般常識は23件であった。前回の調査では「世界史を学ぶ意味は何か」という設問自体が立てられなかったため、この種の意見を記した回答者の数は限られるが、しかし世界史学習は教養を身につけるために大切とする者が断然多い、ということは言えそうである。今回の調査でも一般常識や教養を挙げる意見は依然として多い。ただ、前回と比べると相対的に他の回答が比重を増している様子が見受けられる。このことは一体何を意味するのだろうか。

教養のためというのは、実用には資さないが、人間の幅を広げるのに役立つといった意味合いのことであろう。かたや、国際化への対応や世界情

勢の理解、あるいは自国の理解のためというのは、自己を取り巻く世界を理解し、さらにはそこで自分がどのような態度を取るべきか考えるのに重要だとする、より現実的な期待に基づく意見のように思われる。学生たちの世界史学習の意味づけが、もし前者から後者へ変移する傾向があるとすれば、それは彼らが世界と自己との結び付きをますます強く自覚するようになったことの現れであろう。この点に関してはさらなる調査・分析を要するが、近年の内外情勢が世界史の実用性の意識を高めつつあるということはあるのかもしれない。今回の調査で世界史必修に肯定的な回答が増えたとの結果を先に示したが、このこともこうした学生たちの意識変化と無関係ではないように思われる。

(3) 世界史の授業内容について

世界史必修に否定的ないし慎重な意見を述べた回答者の中には、高校で受けた世界史の授業に良い印象を持っておらず、そのためこの科目を学ぶ意義を感じられないという者が少なくないように思われる。「世界史がおもしろいと思ったことはない」(教2)「世界史が楽しいと感じたことがなく、授業もわかりづらく、自分でもほぼ勉強しなかった」(教2)「つらかった」(教2)「できればやりたくない」(教2)などといった回答は、こうした心情を直接言い表したものだと言える。そこにおいて指摘されるのは、記憶すべき情報の多さ、詰め込みといった、年来言い続けられてきた世界史教育の問題点である。「知識量が多すぎる(キャパオーバー)ため、やる必要性を感じられない」(教2)「1年間で詰めこんで学習したので、ほとんど記憶に残っていないし、役に立ったなど思ったことも特にない」(教2)「テストのために覚えているだけだった気がする」(教2)。加えてまた、これもしばしば言われることだが、授業が完結しないことへの不満が語られる。「私の高校の場合、1年生で世界史は必修だったが、2年以降は選択だったため、内容は途中までしか習っていなかった。なので、現代までの繋がりが全く意識できなかった。ちなみに古代のことくらいまで

しかやってないはず。必修だとしても、中途半端で終わってしまうくらいなら、やる意味がないと思った」(教2)「古代ばかりに時間をさきすぎ、近現代がほぼやられなかった。だからもし必修にするとしたら近現代史中心にやっていただきたい」(教2)。中には、教師の勝手な授業方法を批判する回答もあった。「自分が1年生の頃に世界史Aを受けたが、そのときの先生は『好きのところだけやる』ということで三国志関連の世界史しかやらなかった。それがまかりとおってしまうのであれば、わざわざ必修にしなくてもよいのではないだろうか」(教2)。

世界史必修に肯定的な回答者の間でも、授業は大変だったとの声が散見される、「国毎、時代毎、覚えることが多くあるので、大変ではあった」(教2)「分野やスケールが大きいので、なかなか理解することが難しかった」(教2)。詰め込み授業への批判も見られる、「ただの暗記科目のようになってしまって、肝心な所を学ばないままになってしまう場合が少なくないように思う」(教2)「現代の問題の起源が世界の歴史にあることを学ぶ上で、[世界史は]大切であると思う。実際には、そのような授業ではなかった(暗記中心)」(教2)「受験用に暗記科目として授業されるのならば世界史は苦痛」(教2)。さらに、授業の「手抜き」を指摘する声すらある、「私の高校では、世界史Aを1年生の時に学ぶことになっていたが、先生も雑な教え方で、興味を持たせるというよりは、“こなす”授業になっていた」(教2)「私の習った世界史は、単位を取るためだけのようの中身の無い内容だったため、必修にするのであれば授業もそれ相応の、生徒にしっかり身につく内容にするべきである」(農4)「世界史といっても、羅針盤が出てくるあたりしか勉強していない」(工1)。

一方これに対し、自分が受けた世界史の授業はおもしろかったと、進んで披露する回答者はあまりいない。「世界史は面白かった」(教2)「世界の歴史を浅くでもいいので広く学ぶということはおもしろかった」(工1)はそのわずかな例である。ただしこのことから、高校世界史の授業にネ

ガティブな思い出を抱いている学生ばかりだと結論づけるのは、早計であろう。「受けていて損のない科目だと感じる」(教2)「高校生の頃は世界史ではなく日本史にしか興味がなかったが、世界史を学んだ今では『世界の中の日本』という見方変わった」(教2)「必修部分では現代ではなく古代だったけれど、世界の歴史に興味をもつチャンスだと思う」(教2)。こうした意見からは、自分が受けた授業をそれなりに評価する意識が垣間見える。世界史Aのみ履修した学生の中には、もっと詳しく世界史を勉強したかったという者もいる。「受験科目の都合上で、私の高校では世界史Bが開講されず、世界史Aのみで終わってしまったのを残念に思います」(教2)「日本史だけでなく世界史をもう少しやりたかったと思っています」(教2)。「自分の高校では中国と西欧とアメリカの独立あたりしか扱わなかったが、もっと扱ってもいいと思う」(工1)との回答を寄せた工学部生もいた。世界史を学ぶことで「世界の歴史はどのような教科にもかわりあってくると思う」(教2)「他教科(政経・日本史・地理・古典etc)ともリンクするため、必修であるべき」(教2)との認識に至る者もある。世界史の授業がおもしろかったとまでは言わないが、その有益さを感じたという者は少なくないのではない。

先述のように、世界史の授業の問題点として、詰め込みと中途半端さが指摘される。このことを裏返して言えば、適度な情報量で、きちんと完結する授業が望ましいと見られているわけである。「[世界史を] おおまかにはやった方がいい」(教2)「世界史を少しは知っておいたほうがよい」(教2)「高校で扱う世界史はそこまで [=日本史ほどには] 深く扱う必要はない」(教2)はいずれも世界史必修の賛成者の意見だが、そこには外国史は大筋さえ知ればよく、仔細に立ち入る必要はないとの意識が窺える。もちろん全員がこうした意見を共有しているとは限らず、世界史をもっと詳しくやりたかったという声があることも、先に示したとおりである。世界史の授業を古代から現代まで1年間でやり遂げるのは、実際かなり難し

い。世界史Aのみ履修した回答者で、1年間だけの学習で世界史を十分学べるのか、との疑問を口にする者もあった、「1年しか学習しなかったので、3年学習しないと深い知識は得られないと思った」(教2)。この問題を解決する方策として、高校の現場では時に取り上げる時代を限定したり、主題学習を多用したりといった授業方法の工夫がなされる。しかしこうしたやり方は、「三国志関連の世界史しかやらない」授業を批判する回答に見られるように、生徒の受け取りに好悪のむらがあるようである。回答者の意見は一様でないが、全体の流れがわかる授業、現代へ至るまでのつながりが見える授業を求める声はやや多いと言える。

おわりに

高校世界史は学校で外国史を本格的に学ぶ貴重な機会であるが、学習の負担の大きさや、大学受験に必ずしも必要でないことから、ともすると生徒に敬遠されがちである。学習時間の長い世界史Bを履修する者は比較的少なく、受験科目としてこれを選ぶ者はさらに少ない。今回調査対象となった岩手大学生(主に教育学部生)の場合、世界史Bを履修したのは3割程度であり、世界史を受験したのはほぼ2割であった。調査対象により多くの理系学部生を加えたなら、この割合はもっと低くなったであろう。高校で学んだ授業内容に対する彼らの論評も、あまりかんばしくない。興味を持たなかった、つらかった、内容はもう憶えていない、といった感想に加え、知識の詰め込みや進行の中途半端さなどの問題を指摘する声も散見された。とはいえ、にもかかわらず世界史学習そのものを無用視する意見はあまりなかった。それどころか、今回の調査では世界史必修に肯定的な意見の割合が約6割と、2006年の調査よりかなり増加していた。回答からは、世界史学習を現代世界に生きる上で有益ととらえる学生たちの認識が見て取れる。グローバル化の流れから一見疎遠に見える東北地方の若者たちも、世界との結び付きをますます意識するようになってきたことが、

その背景にあるのかもしれない。

以上に述べた結果をどれほど一般化できるかは、慎重に判断しなければならない。現に、他大学で行われた別の調査によれば、世界史学習をグローバル化と結び付けて考える学生は少ない、との知見も示されている（小川他（2017））。地域や大学、学部、専攻により学生の意識にどのような違いがあるか、今後詳らかにすべき論点であろう。断定的な言い方はできないが、しかし近年の一つの趨勢として、世界史の知識に実用性を認める意識が高まりつつあるということは、十分考えられる。もしそうならば、こうした意識変化——「教養」としての世界史から「実用知」としての世界史へ——を踏まえつつどのような世界史教育を実践していくかが、今後授業者にとってますます重要な課題となるであろう。

参考文献

- 小川知幸・吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萌・畑奈保美・津田拓郎（2017）、「高校での世界史履修に関するアンケートのテキストマイニング分析」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』第19号（近刊）。
- 鈴木道也・吉原秋・小川春美・安井萌・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎（2016）、「大学における世界史教育の現状と課題（1）—世界史学習に関する大学生たちの意識調査—」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』第18号、65-71頁。
- 安井萌（2011）、「世界史未履修問題と岩手大学生—アンケート調査結果によりながら—」『岩手大学教育学部附属教育実践総合センター研究紀要』第10号、23-35頁。
- 吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萌・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎（2016）、「世界史履修に関する短大生の意識調査」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』第18号、59-64頁。
- 吉原秋・小川春美・鈴木道也・安井萌・小川知幸・畑奈保美・津田拓郎・池野健（2017）、「世界史履修に関する学生の意識調査と今後の研究の展望」『岩手県立大学盛岡短期大学部研究論集』

第19号（近刊）。

註

- 1) 9日の授業は学校教育教員養成課程、10日の授業は生涯教育課程・芸術文化課程・その他の学生をそれぞれ対象とする。両授業の受講者に重複は存しない。なおアンケートの実施にあたり、授業担当教員の岩木信喜氏には多大なご配慮をいただいた。この場を借りて御礼申し上げたい。
- 2) 「履修しなかった」とする回答者の中に、自由解答欄に「世界史Aを履修した」と述べる者や、問3で世界史Bを受験したと答える者がいた。集計にあたり、前者の「履修しなかった」の回答は誤記と判断した。
- 3) 大学入試センターのホームページ (<http://dnc.ac.jp>) 掲載のデータに基づく。
- 4) 安井（2011）、29頁；吉原他（2016）、61頁。